

割られた銅鏡

京都府内の発掘調査では、数年に1回程度の割合で古墳時代前・中期の古墳の調査が行われます。その時に調査担当者が期待する遺物として青銅製の鏡があります。発掘調査担当者であれば一度は掘り当ててみたい遺物です。

この時代の鏡は、人の姿や顔を見る手鏡ではなく、古墳に埋葬された人やその継承者が権威を誇示するための道具——威信財^{いしんざい}として使われたようです。時には「ヤマト政権」から同盟関係の証として配布されたと思われます。鏡を作る材料やその技術は、限られた集団でしか保持していなかったと考えられるからです。

鏡は銅と錫^{すず}の化合物である青銅製で、表面を凸あるいは凹面で平滑に仕上げ、背面には想像上の獣や神、幾何学文様^{きかがくもんよう}を描いています。

京丹後市大田南5号墳では、「青龍三年」(西暦235年)の年号が書かれた鏡^{おおたみなみ}が出土しました。中国の三国時代の「魏」の国から贈られた鏡と考えられています。福知山市広峯15号墳では「景初四年」^{せいらう}(西暦240年)という存在しない年号の鏡も出土しています。この

ような鏡は木箱や布にくるまれて大事に棺の中に納められますが、時には意図的に鏡を破砕している例があります。このような鏡を出土する古墳はほんの一部ですが、日本各地で点々と見られます。

京丹後市愛宕神社1号墳^{あたごじんじや}は、一辺約20mの方墳で、



棺の上から出土した鏡 (黒田古墳：南丹市教育委員会提供) 長さ約6mの木棺に死者とと

もに銅鏡、鉄刀、鉄斧、鉄鎌、櫛、玉類などが納められていました。鏡は死者の頭部周辺に完全な形で置かれるのが一般的ですが、この銅鏡（じゅうけいききょう獣形鏡）は破片を重ねて死者の足元の棺の壁に立て掛けた状態で出土しました。割れ方や出土した位置から、故意に割られて納められたと想定できるものです。また、南丹市の黒田古墳では割竹形木棺の中に破砕したそうとうりゅうもんききょう双頭龍文鏡が1面あり、鏡を取り上げて復元



復元された黒田古墳の鏡（南丹市教育委員会提供）

していくとほぼもとの形に復元できました。福知山市寺ノ段古墳のほうかくきききょう方格規矩鏡も割られた鏡の可能性が高いと考えられています。

このような破砕された状態で鏡が出土する古い例は、九州の弥生時代後期に見られますが、全国的には弥生時代末から古墳時代のはじめに集中し、それより新しい時代の例は非常に少なくなります。また、ひとつの古墳群全体の中で割られた鏡は1、2点しかなく、しかもその銅鏡の多くは、古くから伝えられた中国製のものです。

以上のことから、鏡を破砕して副葬するという行為は、各地域の有力者の死に際して行われた儀式のひとつと考えられます。そして弥生時代から古墳時代へと時代が変わる頃に限って行われたのは、社会の変化とそれに伴う勢力の再編とに関係する儀式だったのではないのでしょうか。

なお、古墳時代前期を代表するさんかくぶちしんじゅうききょう三角縁神獣鏡は破砕の対象になっていません。

（長谷川 達）